

今こそ、基本に返った飼養管理を

第1回 分娩舎での母豚の管理

千葉県・なのはなベテリナリーサービス 榎戸利恵

はじめに

PRRSをはじめとした慢性疾病が猛威をふるい、さらに飼料費の高騰が日本の養豚産業に追い打ちをかけています。このような状況を打破するためには、何よりも基本に返った飼養管理を実践し、生産性を上げることが大切だと思われまます。

そこで今回から三回にわたって、
 ①分娩舎での母豚の管理、②離乳後から三〇kg前後までの子豚の管理、③三〇kgから肉豚出荷までの管理と題して、飼養管理の基本を掲載する予定です。シンプルに基本を押さえていきたいと思えます。皆さまの農場経営に役立てば幸いです。

第一回となる今回は、分娩舎での特に母豚の管理について、書かせていただきます。

分娩舎での飼養管理

分娩舎での飼養管理は、生産成績

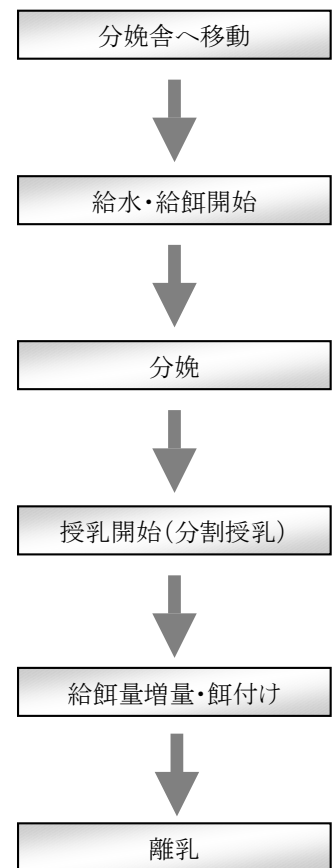


図1 分娩舎で行われる作業

において、以下の成績として現れています。

- ① 離乳子豚数
- ② 離乳子豚体重
- ③ 次回の母豚発情回帰日数

これらの成績を決定するのが、分娩舎で実施される主に次の管理です。農場により、分娩舎で行われる作業は、多少の違いはあると思われまますが、おおよそ図1のように集約されると思えます。

それぞれの注意点を考えてみましょう。

(1) 分娩舎への移動

ストールから分娩舎へ移動します。分娩直前の移動は、母豚のストレスになり、分娩時間の延長や、難産の原因にもなるので、分娩予定日の一

週間前には移動しておくようにしましょう。筆者の経験だと、分娩中移動に遭遇し、陣痛がストップしたケースがあります。

(2) 給水・給餌開始

分娩舎でのピッカーからの流水量は、二〇ℓ/分必要です。この量が確保できていないと、授乳中に食い止まりを起こし、給餌量を増やすことが困難になるケースが多いので、注意が必要です。

よく、井戸水の供給量の限界から、ピッカーからの流水量が上手に確保できないケースがありますが、このときは、ホースで水を飼槽に追加し入れるなどの配慮が必要です。分娩前の給餌量は、経産豚で一日三kg程度です。なお、いうまでもないこ

とですが、圧死の予防のため、分娩当日や、分娩中は給餌は控えましょう。

(3) 分娩

分娩予定三日前に、ブルーダーをセットします。

分娩日は決定していても、一〜二日早く生まれるケースがあり、分娩直後に保温されないと、急激に体温が奪われ、体力を消耗するからです。

また、圧死の予防のために、人が作業する昼間に生ませる方法があります。プロスタグランジンの筋肉内投与です。朝一〇時くらいに注射すると、約二四時間後前後に分娩します。

(4) 授乳開始

子豚が生まれたら、十分に母乳を飲ませます。このとき、初乳をよく



写真1 快適な温度



写真2 温度が低すぎる場合



写真3 温度が高すぎる場合

飲ませることを最優先とし、里子をする場合は初乳を飲ませた後に実施

します。初乳の摂取は、母豚の移行抗体やリンパ球を得るために大変重要ですので、すべての子豚が確実に飲めるように、分割授乳をお勧めします。

また、方法は、腹のうち、小さな哺乳子豚に優先的に初乳を飲ませるために、大きな子豚をかごに入れて閉じ込め、三〇分〜一時間程度置き

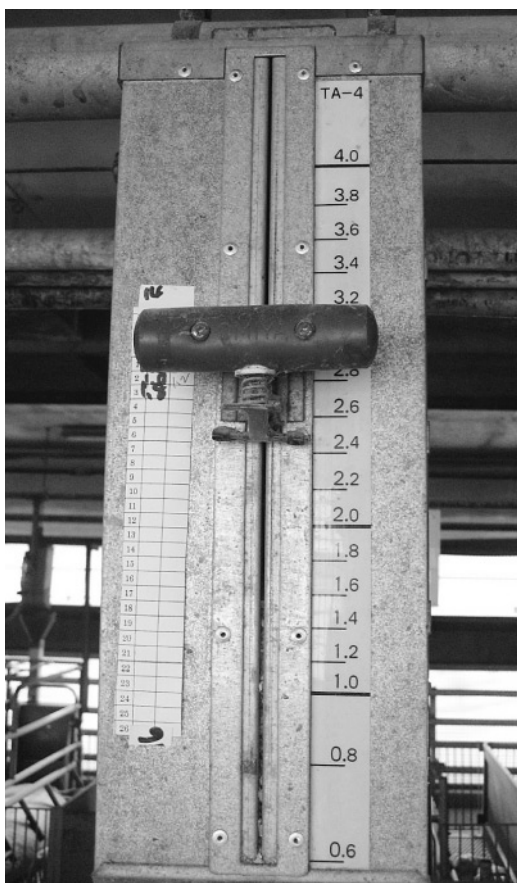


写真4 給餌量ラベルの使用

ます。この方法を朝生まれた腹ならば、午前・午後の二回、午後に生まれた腹ならば、午後、翌日朝の二回実施します。これを徹底すると、腹の中で弱い子豚の事故が軽減され、離乳子豚数も増える傾向があります。また、離乳体重も揃ってきます。

子豚が生まれたら、ブルーダの温度の調節は毎日します。これは、毎日の外気温度の日較差があるためと、成長具合によって、子豚の快適温度が変わってくるからです。また、外気温や隙間風などによっても若干の影響があります。写真1と3は、ブルーダの温度がそれぞれ快適な場合、高すぎる場合、低すぎる場合です。温度が高すぎると、保温スペースから逃げるので、結局寒い場所にいることになり、下痢を起こします。また逆に温度が低すぎると、母豚の脇の下などで寝るので、圧死を起こしやすくなります。

表1 未經産豚の給餌量

分娩日		(初産)																													
日/kg	分娩前	分娩	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
0.5		0.5																													
1			1																												
1.5				1.5																											
2					2																										
2.5						2.5																									
3							3																								
3.5								3.5																							
4									4																						
4.5										4.5																					
5											5																				
5.5												6																			
6													6																		
6.5														6.5	6.5	6.5															
7																															
7.5																															
8																															
8.5																															
9																															
9.5																															
10																															
10.5																															
11																															
母豚 No.		産子数、死亡等																													

作成：なのはなベテリナリーサービス

表2 経産豚の給餌量

分娩日		(経産)																													
日/kg	分娩前	分娩	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
0.5		0.5																													
1		~																													
1.5		1.5	1.5																												
2				2																											
2.5					2.5																										
3						3																									
3.5							3.5																								
4								4																							
4.5									4.5																						
5										5																					
5.5											6																				
6												6																			
6.5													7																		
7														7																	
7.5															8																
8																8															
8.5																	9														
9																		9													
9.5																			10												
10																				10											
10.5																															
11																															
母豚 No.		産子数、死亡等																													

作成：なのはなベテリナリーサービス

表3 分娩舎で使用される主な要指示医薬品と休業期間

薬品名	使用目的	休業期間
水性アンピシリン	産褥熱、乳房炎	7日間
ペニシリン	産褥熱	14日間
テラマイシンLA	産褥熱・哺乳子豚の下痢	30日間
ビバトップ	産褥熱	30日間

※各製品により、休業期間の設定が違います。獣医師の指示を守ってください。

(5) 給餌量の増量

母豚が十分な母乳を出せるように、給餌量を増量していきます。分娩日もしくは翌日一日〇・5kgからスタートし、分娩後二週間くらいで、一日一〇kgになるように、徐々に増やしていきます。

初産豚は、経産豚よりも食べません。母豚の授乳中の飼料摂取量は、主に給水量、室温に影響されることが多いのです。よく見られるケース

として、ピッカーからの流量が一時間に五〇〇ml程度で、室温が二五℃以上のような豚舎では、母豚が暑く感じて息を切らしている上に、ピッカーからの流量も、本来二ℓ/分程度必要なところ、その四分の一ですから、人間でいえば、吸えないストローで飲むことと同じで、飲む

力がなくなってしまう。飲水量が減れば、それに比例して、飼料摂取量も減少します。ピッカーの能力でそれ以上出ない場合は、ホースで飼槽内に水を張るなどの配慮が必要です。また、毎日、母豚がどのくらい餌を食べたかは、記録しておく、非常に分かりやすくなります(写真4)。筆者は、表1、2のようなチェックシートを作成し、クライアント農場にお渡しして記入してもらっています。筆者の経験では、分娩舎の成績が良い農場は、決まって給水量と室温が安定しています。

母豚給餌量アップのための必要条件

母豚給餌量アップのための必要条

件として、

- ①室温は一八〜二〇℃を目安に(実際幅は一八〜二二℃)。
- ②ピッカー流量を二ℓ/分が挙げられます。

分娩舎で母豚が餌をたくさん食べさせ、たくさんのお乳を出すと、食べさせない場合に比べ、離乳後発情回帰日数が短縮します。

離乳

離乳日には、次回の発情早期化を狙ってプロスタグランジン(PG)やPM5Gなどのホルモンを使用する方法があります。この方法の詳細については、今回は省略しますが、プロスタグランジンは休業期間が天然型ですと一日、人工ですと七日間です。獣医師の指示を守りましょう。よく見かけるケースが、分娩中もしくは授乳中に、母豚の具合が悪くなり、治療をしまったのですが、その後、出荷したいのに、休業期間が終わるまで、しばらく置いたままにいるというものです。それが、農

場にとって取るに足らないケースならばよいのですが、ひどい場合だと、そのまま出荷せず、放置…。必要のない母豚を何日も豚舎内に置くことは、経済的な負担のみならず、農場にとっても、作業する人にとっても余計なストレスとなりませんか？

このような事態に陥らないために、要指示薬を使用する場合は、計画性を持って実施しましょう。参考までに分娩舎で使用される主な要指示医薬品と休業期間を表3に示しました。

離乳後、子豚をしばらく分娩舎に置くことがあります。この方法は、離乳直後に離乳舎へ移動する方法に比べ、喧嘩やストレスを軽減する効果があります。母乳から離れて、人工乳のみになるわけですから、水分が必要です。写真5は、離乳後に母豚の飼槽に水を貯めたものです。子豚が興味を示して、水をよく飲みます。母豚の給餌器の高さは、通常離乳子豚が届かない程度ですが、写真では、飼槽を取り外して、少し低めに設定し、針金で止めました。また、ブロックなどを飼槽の前に置いて、階段にする方法もお勧めです。



写真5 離乳後、しばらく子豚を分娩舎に置く場合。餌箱に水が張ってある。

まとめ

今回のまとめとして、以下の五点を挙げておきます。至ってシンプルですが、実施していなかった部分を実践するだけで、離乳子豚の大きさは目に見えて改善されます。是非、

実践してみましよう。

①母豚は、分娩予定日七日前には分娩舎へ導入すること。

②分割授乳を実施すること

③母豚用ピッカーは流量をチェックし、一分間に二ℓ出るようにすること。

④母豚を快適に過ごさせるため、分娩舎の温度は一八〜二二℃程度にすること。哺乳子豚の保温は、保温箱かブルーダーで確保し、基本的に母豚とは別で考えること。

⑤授乳中の治療は、使用する薬品の休薬期間を考慮の上、実施すること。



第二回は八月号に掲載予定です。

<http://nanohanavet.jp/index.html>

もご覧ください。

つづく

